

吾謫海南 子由雷州 被命卽行 了不相知至梧 乃聞尚在藤也
 旦夕當追及 作此詩示之

吾海南に謫せられ 子由は雷州たり 命を被つて即ち行き 了に相知らず
 梧に至りて 乃ち尚ほ藤に在るを聞く 旦夕當に追及ぶべし 此の詩を作
 りて之に示す

紹聖四年五月（一〇九七）六十二歳 梧州で作る。海南島儋州へ向かう旅途。

1 九疑聯綿屬衡湘 九疑 聯綿として 衡湘に属なる

2 蒼梧獨在天一方 蒼梧 独り天の一方に在り

3 孤城吹角煙樹裏 孤城 角を吹く 煙樹の裏

4 落月未落江蒼茫 落月 未だ落ちず 江 蒼茫たり

5 幽人拊枕坐嘆息 幽人 枕を拊つて 坐に嘆息す

6 我行忽至舜所藏 我 行 忽ち 舜の藏する所に至る

7 江邊父老能說子 江邊の父老 能く子を説く

8 白須紅頰如君長 白須 紅頰 君の如く長しと

9 莫嫌瓊雷隔雲海 嫌ふ莫れ 瓊 雷の雲海を隔つるを

10 聖恩尚許遙相望 聖恩 尚ほ許す 遙に相望むを

11 平生學道眞實意 平生 道を学ぶ 眞實の意

12 豈與窮達俱存亡 豈に窮達と俱に存亡せん

13 天其以我爲箕子 天 其れ我を以て 箕子と爲し

14 要使此意留要荒 要 ず 此の意をして 要荒に留め使めむとす

15 他年誰作輿地志 他年 誰か 輿地志を作らむ

16 海南萬里眞吾鄉 海南 万里 眞に吾が郷

【語釈】・子由雷州：弟の蘇轍は雷州へ謫された。・即行：すぐ旅行にたった。了不相知：まったく知らなかった。・梧・藤：梧州と藤州。ともに広西省。相互の距離、約五〇キロ。・示之：すぐ追いつくようにするわけであるが、まずこの詩を子由に送りとどけた。・九疑：九疑山。湖南省寧遠県の南六十里。よく似た形の峯が九つあるという。・属：連（つらなる）。・衡湘：五岳の一つである衡山と洞庭湖にそそぐ湘水。・蒼梧：舜が死んだという蒼梧の野。いま東坡の来ている梧州をいう。・蒼茫：豊韻の語。蒼は深青色、茫は広大なさま。・幽人：黄州の詩にもしばしばみえる自称。・拊：撫でる。撃つ。・所蔵：葬ったところ。葬とは死体を埋めることで蔵と音義が近い。・子：東坡が子由に向かつていう。・君：父老が東坡に向かつていう。・瓊雷：瓊州と雷州。・箕子：周の武王、殷の貴族。・要荒：五服（甸・侯・綏・要・荒）蛮夷の地。・輿地志：地理のこと、此処では地方志（その地方出身の有名人の略伝を記す）

【解釈】九疑山は九つの峯がずっと連なって、まだ中原の衡山や湘水とつながりを保っていたが、ここ梧州まで来ると、蒼梧の野はまったく中原から切り離されて、ただひとり遠く天の一方に存在する。県城に流れる角笛の音は、朝靄に、けむった立ち樹のあたりから起こり、落ちかかっている月のまだ落ちきらぬいま、西江の水はぼおつと霞んで遠くひろがっている。

とらわれのわが身は、枕を撫でつつ、おもわずためいきをもらす。わたしも旅路をかさねて、いつしか舜が崩じて葬られているところまで来ているのだ、と。江辺のまち、この梧州の父老たちは、君のことを上手に説明してくれた。「白いお鬚に、あから顔で、あなたのように背たけの高いおかたでしたよ」と。

瓊州と雷州と、雲海を隔てて暮らさねばならぬけれど、不平はいうまい。流謫に処せられた身のわれわれ兄弟が、海をへだてても遙かに望みみることをお許しただけしたのは、天子さまのご恩なのだから。ひごろ、道を学んで来たのは、真実の意を求めてであった。それは人生行路の窮達に左右されて、とらえていたり失ったりしてよいものではない。

天はわたくしを、周のとき朝鮮を教化した箕子のようにして、この真実の意をば、ぜひとも蠻夷の地にとどめさせようとしているのだ。後年、この地方の地志を編集する人は誰だろう。わたくしが、海南万里の地を、真にわが故郷と思っていることを忘れないで欲しい。（漢詩大系 蘇軾 近藤光男より抄出）